

赤瀬達三氏のサインデザインに関する永年の研究及びデザイン活動に対して

株式会社黎デザイン総合計画研究所代表 赤瀬達三

サインデザインとかがわって45年になるが、主にしてきたことは三つある。一つ目は公共サインのスタンダードを示すこと、二つ目はこの国全体にその設計ポイントを伝えること、三つ目は特に若者に、パブリックと空間のかかわりについて考える機会を与えることだ。

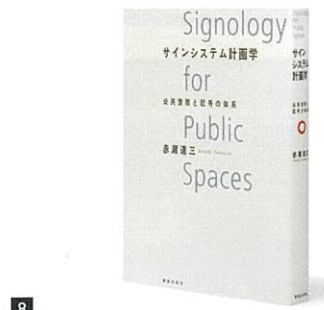
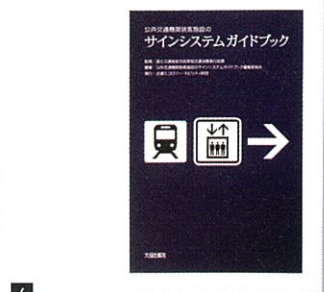
第一の活動の起点は、営団地下鉄のサインデザインだった。1973年初夏の大手町駅に、はじめてサインをシステムとして示した。乗車系、降車系、一般系など、人々の動きに応じて体系だった情報を提供する様式は、そのとき以来、これが基準になった。

第二の活動の場は、国土交通省におけるさまざまな提言だった。「案内用図記号」「旅客施設の移動円滑化」「道路の移動円滑化」「観光活性化」「外国語の情報提供」などのガイドライン策定に、草稿執筆などで協力した。国土交通大学校では、20年、サイン計画の講義を続けている。

第三の活動の対象は、東京大学、千葉大学、東京都立大学、千葉工業大学、放送大学などの学生たちだった。いわゆるサインに限らず、空間というものには記号によって成り立っている。その記号という切り口から、パブリックな人々と空間のコミュニケーションを考える。

昨年、鹿島出版会から出した『サインシステム計画学—公共空間と記号の体系』は、その文献となることを意図して書いた。

このたび特別賞を戴くことになった。関係各位に謝意を表したい。紙面を借りて産官学とかがわる活動例を示したが、パブリックデザインの課題を考える一助にいただけたら幸いである。



1. はじめて体系化された案内情報を提示して、30年間デザイン監修を続けた営団地下鉄のサインシステム
2. 委員会による調査研究ののち、10年の歳月をかけて得られた鉄道事業者協同による横浜駅コンサイン
3. 標識令で決められて以来、はじめてフォントを入れ替え、視認性の改善を図った首都高速道路の案内標識
4. わかりにくい複合施設の弱点を補うため、場面の成り立ちを伝えることに着目した六本木ヒルズのサイン
5. 草稿執筆『交通拠点のサインシステム計画ガイドブック—鉄道ターミナル駅を例とした人にやさしい情報提供の考え方と計画手法』交通エコロジー・モビリティ財団 1998
6. 共著『公共交通機関旅客施設のサインシステムガイドブック』交通エコロジー・モビリティ財団 2002
7. 共著『ひと目でわかるシンボルサイン—標準案内用図記号ガイドブック』交通エコロジー・モビリティ財団 2001
8. 単著『サインシステム計画学—公共空間と記号の体系』鹿島出版会 2013